

# サハ社会における馬飼育と不在家畜所有

——ポスト社会主義下における家畜委託関係と社会経済的変動の諸相——

高 倉 浩 樹

Horse husbandry and Absentee livestock ownership in the Sakha: Horse trust  
relationship and Socio-economic transitions under the Post-socialist era

TAKAKURA Hiroki

## 1. 序 論

本論文はシベリア、中央ヤクーチアのサハ社会における馬飼育とその委託関係について不在畜群所有 (absentee herd ownership) という観点から扱うものである。約70年続いたソビエト社会主義の時代の農業及び文化政策によって他のシベリア先住民と同様に、サハ人の伝統的生活そして彼らの生業である牛馬牧畜は大きく変容した。伝統的生業に対する集団化そして産業化が進行し、彼らの人口は約1.5倍に増え、半遊動的生活様式は、行政集落あるいは都市への定住生活となった。社会経済的な変化の中でもっとも際だっているのは、サハの人々にとって就くべき職業の種類と数が大きく増大したことであろう。たとえ農村部に住むものであってもかつて伝統的生業と見なされた仕事以外に就くことができたからである。こうしたソ連時代に形成された状況は、ポスト社会主義の今日において、再び変動の途にある。本論文では、伝統的牧畜が大きく変容したいわば産業化された先住民社会における家畜の委託関係及び不在畜群所有に注意しながら、サハ社会の変動する一側面を照射しようとするものである。

ソ連崩壊前後から今日に至る10数年の間に、旧ソ連圏以外の人類学においても、ポ

---

**key words** : Yakutia, Sakha, horse husbandry, trust relationship, absentee herd ownership  
キーワード : ヤクーチア, サハ, シベリア, 馬飼育, 委託関係, 不在畜群所有

スト社会主義下におけるシベリア諸民族社会の変容に関する研究は数多く蓄積されるようになった。そうした研究動向のなかにあつて、本稿が取り上げるサハの馬にかかわる委託関係という本稿の問題関心は、馬飼育に対する民族誌研究の蓄積というより、トナカイ飼育に関する民族誌資料及びその理論的視座を受けて設定された。というのもこの二つの生業は社会主義経済体制における肉畜中心としての畜産化という点と、その飼育方法において牧夫が定住村落から離れ放牧地での遊動生活を送りながら周年放牧を行うという点で共通しており、同様の視座に基づくアプローチが可能だからである。さらにいえば、馬飼育に対して本稿がアプローチするような社会経済的視点からの研究は、畜産学・農業経済学を中心に蓄積されてきたという背景がある。世界観・儀礼研究といった領域を除けば、近年サハの馬飼育に関する研究は人類学・民族学的視点からはほとんどされてこなかった。

牛馬飼育というサハの伝統的生業は中央アジア・南シベリア・モンゴル諸地域の諸民族のそれと起源論的には共通するものであるにもかかわらず、トナカイ飼育との共通性を前提にして議論の枠組みとして設定するという主張はやや奇異に思われるかもしれない。とはいえ、これはテュルク系諸民族にあつて最も北方に分布し、長期にわたって周辺のツングース系・古アジア系の諸民族、さらにロシア人と文化接触を続けてきたサハの歴史的・文化的位置を考慮すれば故なきことではない。サハ人の歴史的・文化的・政治経済的中心ともいえる中央ヤクーチアではトナカイ飼育が生業として定着することはなかったが、北部のサハにとってはトナカイ飼育もまた重要な生業活動の一つだった。社会主義体制下の北部ヤクーチアにおいて主たる産業となったのはトナカイ飼育であり、牛馬飼育は副次的な位置づけにあつた〔斎藤1995〕<sup>(4)</sup>。私自身はこの北部ヤクーチアにおいてトナカイ飼育を中心に民族誌研究をはじめ、次いで馬飼育に関心をもつた。周年放牧をおこなうという点で牛飼育と異なるトナカイと馬の飼育は、放牧地の一部を共有しているだけではなく、牧夫自身が相互に入れ替わることも可能なのだつた。そうした北部ヤクーチアにおける民族誌的観察から導き出されたのが、馬飼育のとりわけ社会経済的諸相に関わる問題とトナカイ飼育のそれとが共有されるという視座なのである。

こうした前提をふまえて、トナカイ飼育に関わる近年の人類学的研究をみると、十分照射されてこなかった領域があることに気がつく。それは、牧民とトナカイ飼育の職業に就かなかつた多くの人々との関係である。念頭におくべきなのは、今日のシベリア先住民社会にあつて非牧畜、より正確には非畜産従事者の人口数は決して無視できる少なさではないということだ。場合によっては逆転している場合さえある。この

問題が十分検討されずに残されていることは、シベリア先住民の牧畜の産業化と今日に至るその結果の諸相についてまだ十分な検証が行われていないということの意味している。

以下ではまずこの問題をとらえるにあたっての理論的枠組みと必要な諸概念を提示したいと思う。それは近年、現代牧畜社会研究において論じられている「不在畜群所有」の問題群である。この概念を批判的に検討することで、社会主義及びポスト社会主義におけるシベリアの伝統的牧畜の変容について比較研究に耐えうる説明の定式化をおこなうつもりである。その上で、サハの馬飼育とそれに関わる委託関係の背景と現在のあり方がもつ民族誌的意味について考察したい。

本論のより具体的な目的は、サハ社会の馬委託関係にかかわる社会経済的諸相を提示し、その変動のありかたについてポスト社会主義の現在の文脈から検討を加えることである。この問題は、すでに発表された拙稿 [Takakura 2002] におけるいくつかの問題ともつながっている。かつて私は、社会主義体制下において「制度化されたヒト——馬関係」に注目しながら、馬の生殖管理において見られる文化的意義と国家による農牧産業制度のからみあいを提示し、ソ連崩壊後の変化について論じた。この研究はいわば、文字通りのフィールドつまり放牧地で働く牧夫の実践と知識に焦点をあてたものであった。本稿は、そうした問題を産業化された先住民社会の文脈に置き直し、マクロ・ミクロ双方の視点から多面的に検討を加える試みである。

なお本稿で用いられる民族誌的資料は、1999～2001年において断続的に行われた計4ヶ月にわたる現地調査で収集された。主たる調査地はロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）の中央部に位置するメギノ・カンガル郡タバガ村（s./Tabaga, Megino-Khangalaskii Ulus=Raion, Republic Sakha, Russia）であるが、これに隣接する同郡内の諸村及びメギノ・カンガル郡に隣接するハンガラ郡（Khangalaskii Ulus）のいくつかの村及びサハ共和国の首都ヤクーツク市においても調査を行っている。

## 2. 不在畜群所有論とポスト社会主義

近年、現代牧畜研究の領域において論じられている問題の一つに「不在畜群所有者 (absentee herd owners)」という概念がある。不在畜群所有者とは、放牧地でおこなわれる家畜の世話・管理は他人に任せ、基本的に放牧地にはいない所有者である。本稿の題目が示しているのは、家畜群の所有者とその管理者が異なっていること——それ

は所有者と、管理者すなわち雇用された牧夫の間に委託関係が必要とされるということである。

伝統的な意味で、遊動牧畜民＝遊牧民 (nomadic pastoralist) とは、通常家族などを単位として自らの畜群とともに移動する人々である。これに対し放牧地での動物自らの喫食行動に直接的あるいは間接的に依存する生業を担う人々——広義の意味での牧畜民 (pastoralist) とは異なっている [Gilles and Gefu 1990:100]。とはいえ畜群・家畜の管理を担う牧夫とその所有者が一致していないという状況は、伝統的な牧畜社会はもちろんのこと、遊動牧畜社会の歴史にあって特に珍しいものではない。そこでは家畜は単なる生業のために必要なものとして見なされるのではなく、むしろ象徴的・社会的な交換価値が見いだされてきたからだ [佐藤1995; 曾我1998; 利光1986等]。にもかかわらず、近年あえて「不在畜群所有者」あるいは「雇用牧夫 hired herder/shepherd」といった用語が必要とされるようになったのは、近代国家の諸政策や近代化といった影響を背景に、伝統的な遊動牧畜社会が大きく変容しているためである。定住化政策とともに市場指向が強まる中で、不在畜群所有者や雇用牧夫が登場し、そうした事態に対する研究者側の問いかけ——諸変動は牧畜民の世界にとって何を意味しているのか——を引き起こしたのである。

こうした研究動向に先駆けて A. ヒョルト (Anders Hjort) は1980年代初頭に問題提起を行っている。彼は牧畜社会の研究は、従来の生態学的モデルないし技術還元主義 (technical reductionism) から、政治生態学 (political ecology) ないし社会経済的要因に関する経験主義的分析に移行すべきであると述べている [Hjort 1982]。この前後から、そうした視点に基づいた多くの研究が蓄積されてきた [小長谷2001; Beck 1980; Fernandez-Gimenez 1999; Little 1985; Mearns 1996; White 1990]。それら研究の多くは、不在畜群所有者の発生に関する条件と要因そして結果、さらに牧畜社会内部そして外部との関係において不在畜群所有者の役割がどのようなものであるかについて焦点を当ててきた。

その初期の研究として、イランのカシュカイ人 (the Qashqa'i) における牧畜の部族的役割の変化に関する研究がある。1970年代中葉におけるイランの国家政策の変容と国民経済の圧力が牧畜民に大きな影響を与えたからである。国有化・土地改革・農耕地の拡大・商業化といったさまざまな要素が、放牧地に対する部族の支配——彼らの移動・遊動日程・土地利用パターン等——を阻害した。同時に市場の圧力の増大は、カシュカイ族のヒツジの群れの大きさやその構成自体にも影響した。伝統的に彼らは自家消費と社会的交換のために家畜を育ててきたが、家畜の市場価値に目を向ける必要

が出てきたためである。その結果、「牧畜自体は継続したが、世帯内労働は農耕のために定住して行う部分と、牧畜のための遊動に費やされる部分とに分離した」。さらに社会階層化も進行し、他人の家畜を契約して請け負う放牧（contract herding）が発展し、その結果雇用された羊飼い（hired shepherds）が現れたのである [Beck 1980:341-348]。

ナイジェリアのフルベ族についての事例研究を見てみよう。1974年以降、牧畜のフルベ族の近隣に暮らす農民・商人・役人達によって家畜への投資が増大していた。こうした投資家達が所有する家畜の管理は、牧畜民によって行われていたが、このことはフルベ族の家畜管理——例えば伝統的な井戸の利用や移動・搾乳・家畜の貸付のあり方——に大きな変化をもたらした。外部の投資家達の家畜に対する態度によって、徐々にであったが牧畜民たちのそれも変わったのである。前者すなわち投資家でありかつ不在畜群所有者達の市場指向によって、牧夫達は（市場に近い）村の近くの牧草地——その質は悪いにもかかわらず——で家畜を放牧せざるをえなくなった。その結果、牧夫達は投資家達の家畜と自らの家畜とを、物理的な空間（別々の群れ）かつ象徴的な意味（別個の類別名称）の双方において分離させるようになったと報告されている [White 1990]。

研究者の中には、こうした不在畜群所有が伝統的な放牧地の利用と生態学的な条件双方に否定的な影響を与えていると見なしている者もいる。北ケニアのチャムス族のあいだで現地調査を行ったリトル [Little 1985] は、近年の過剰家畜数や過剰放牧の原因は、現地のコミュニティ内部の問題というよりも、外部からやってきた臨時の牧畜民 (part-time pastoralists) や不在畜群所有者に帰せられるべきであると主張している。有名なハーディングの「共有の悲劇論」を批判しながら、チャムスにおいては、むしろ放牧地の私有化こそが不在畜群所有者を出現させ、牧草地破壊の悲劇を生んだと指摘している。一方、ポスト社会主義モンゴルの事例を扱った M. フェルナンデズ-ギメスは、不在畜群所有の役割を別の視点から論じている [Fernandez-Gimez 1999]。彼女によれば、ポスト社会主義の時代にあつて不在畜群所有は、モンゴルの歴史に根ざす牧夫と都市住民の家畜所有者双方にとって有益な文化を存続させる活力 (cultural survival) なのである。

こうした研究動向の触媒となったのが、世界各地における牧畜民社会の変容であったことを改めて確認しておこう。ギルとゲフ (Gill and Gefu) は、その傾向を「危機にある遊牧」と呼び、三つの特徴を定置している。第一に国境の設定・農耕地の拡大・定住化を伴う遊動民の移動性自体を減じようとする国家の政策などを原因とした

牧畜民の移動性の変化である。第二点として牧畜生産システムの変化がある。近代国家は、牧畜民の部族主義に強い圧力をかけ、牧草地の規制を進めた。国民経済が牧畜民にも浸透し、家畜市場が著しく拡大することで、家畜所有の性質そのものが変わった。その結果、牧畜民の中には伝統的な生活を放棄し、都市や農村の雇用労働者となる一方で、牧畜民に対して自らの家畜の世話をする必要がある非牧畜民の投資家が出現したのである[Gill and Gefu 1990:105-107]。このギルとゲフの最後の定式化こそ、研究者の多くが不在畜群所有者についてなぜ注目するかを示している。

基本的に近代国家は、伝統的牧畜をもはや現状にそぐわないものと見なしている。彼らが牧畜にとって替わる選択肢として思いつくのは、南北アメリカ大陸、オーストラリア、ニュージーランド等に見られる馬・牛・羊等の家畜飼養であるランチング・システム(ranching system, 放牧農場制)あるいはモンゴル、中国そして旧ソ連の集団化された放牧システム(herding collectives)である。家畜生産に関わる立案計画者にとって、ランチングは理想的なものであるらしい。というのも、現代の獣医学的技術も付け加えられたこのシステムの場合、環境破壊への負荷がより少なく、高度の生産効率が確保できるので、単に牧民だけではなく、都市の消費者にも生産物が行き渡ることが可能だと見なされるからである。ランチングと伝統的な牧畜の違いは、前者において「法的に画定された土地領域において行われる定住者の視点による経営」であり、土地はリースされるか私的所有におかれ、また家畜もまた私的所有にある[Gill and Gefu 1990:109-110; Ingold 1980]。ギルとゲフの二人が描写を試みたのは、現代の資本主義システムが包摂する遊動牧畜民の姿と、一方のランチング・システムの関係についてのバランスのとれた理解像を提示することであった。とりわけ、牧畜民とランチャーには共通性が見られることを通して、政策決定者にとって一方的に批判的な対象となる遊動牧畜のあり方を再考させる問題提起をおこなっている。

本稿はその問題提起をうけて展開されるものではない。むしろ彼らが「危機にある牧畜」として定位した三つの論点をふまえつつ、遊牧に対する代替選択の一つであった近代化「集団化された放牧システム」について焦点をあてるものである。社会主義国家において行われたこのシステムについては、単にそれが伝統的牧畜とは異なると述べるだけでは不十分でしかない。ランチングと同様にその歴史的・社会経済的枠組みを参照しながら、伝統的な牧畜のあり方との関わり／ないしその変容について一定の理論的接合を検討する必要がある。定住化と集団化に象徴される社会主義国家の政策の位置づけこそ、現在の牧畜社会の変容に関する比較研究において新たに光を当てなければいけない領域であると考えからである。

確認しておきたいのは、ポスト社会主義のモンゴル・中央アジア・シベリアにおいて1930～1960年代に生産様式としての伝統的遊動牧畜は消滅したことである [小長谷2001:15, Humphrey & Sneath 1999:1; Khazanov 1998; 1990; Krupnik 1998:231]。現代の遊動牧畜社会の変容についての概況を論じた A. ハザーノフは、中央アジアのカザフに対するロシア植民地主義の効果は、西欧のアフリカ牧畜社会に対するものと基本的に同じものだったと指摘している。というのも土地の喪失・移動性の制限・生活水準の低下・自然環境の悪化・農耕民の移入の増大といった一連の出来事がおこり、その結果、牧畜社会は外部の社会に対する依存度を高めたという点で両者は共通しているからである。カザフ人における生活様式としての遊動牧畜は1930年代に始まる集団化と定住化によって終焉するが、ハザーノフはその意味を次のように説明している。牧畜民自身が放牧の対象とする家畜の管理ができなくなったことは——それは直接の生産者としての立場からの疎外であり、同時に（放牧地には）不在畜群所有者 (absentee owners) への家畜の集中である——深刻な生態学的及び社会的不安定さへとつながった [Khazanov 1990:89-90, 96]。

彼もまた、近代国家及び開発関係者達によって進められた牧畜民をよりスムーズに近代化させるために採用された二つの解決策について論じている。一つは西側諸国において見られるランチング・システムであり、これは「十分に発展した市場構造があるとの前提のもとに、伝統的な牧畜民を商業的な家畜生産者へと変える」ものである。もう一つは社会主義国及び一部の第三世界の政府によって採用された定住化と集団化である。ハザーノフ自身はこの二つのアプローチとも結果として失敗だったと見なしている。というのも、ランチング・システムはこれを維持するのに膨大なコストがかかり、多くの第三世界の国家においては、西側国家が可能なほど、十分な補助金とサポートを与えることはできなかったからである。後者については、すでに悲惨な結果として証明済みと見なしている [Khazanov 1990: 94; 1998:12-16]。

筆者の立場は、上述のハザーノフの二つの論文において基調であった伝統的牧畜の未来について悲観主義を繰り返すことではない。むしろ上記に説明した研究の成果からは、次の三つの論点の定式化が可能であることを確認したい。第一に、集団化と定住化は遊動牧畜民に対する近代化の一つの方法であったということだ。第二の点は、シベリアの遊動牧畜民が、土地と家畜の保有・移動性・社会そして労働組織、さらに人々の認識のレベルにおいても伝統的牧畜社会から完全に近代化された社会へと移行したことである。第三に、集団化と定住化が行われる中でコルホーズ（ソフホーズ）に家畜の所有が集中し、牧夫の所有から家畜が離れたこと、つまりコルホーズこそが、

放牧地に不在の所有者としての役割を担うようになったことである。この点からすると、不在畜群所有者 (absentee herd owners) という概念は、単に変動する伝統的遊動牧畜社会を照射するだけでなく、すでに変容してしまった社会についても一定の示唆を与えることが可能であるといえるだろう。正確に言うならば、社会主義体制下の主たる家畜の所有者は国家それ自体であった。ソフホーズ (国営農場) はもちろん、コルホーズ (集団農場) にしてもそれらは牧夫の遊動・移動性・群れの構成などの決定について直接指示を与えることが可能な不在畜群所有者の代理人的役割を果たす存在であった。ポスト社会主義の現在、国家に集約されていた不在畜群所有というあり方は、コルホーズ・ソフホーズといういわば国家の代理人から私的な個人へと移行している——と要約することができる。私が分析の対象とするのは、伝統的牧畜社会から移行した社会において、現在どのような人々が不在畜群所有者となり、それは何の目的であるのか、さらにその結果がどのように現れているのかを検討することである。

以下では、不在畜群所有者という概念をシベリアとりわけサハ社会に当てはめ、この概念をとおして見えてくる社会経済的な変動について経験主義的分析を行う。さらにその変動過程を理論的に定式化するとともに、本稿で用いられる方法論の含意について一定の展望を述べたい。

### 3. シベリア先住民社会における不在畜群管理と不在家畜所有

ここ十数年の間に、英語圏及び日本語圏人類学において、シベリア先住民を対象とする民族誌的研究は飛躍的に増加している [渡邊2002:53]。その中にあって先住民の伝統的生業の一つであるトナカイ飼育に焦点をあてた研究は数の上でも多く [Krupnik 2000]、いわば牽引的な位置の一つにあるといえる<sup>(2)</sup>。そこでの主題を簡単にまとめるならば、牧民とその雇用組織 (旧ソフホーズ等) の社会経済的構造や、牧夫の生態学的民俗知識と牧畜活動の実践、生業活動及び土地保有、民族アイデンティティ・エスニシティといったトナカイ飼育の変容と今日におけるその性質についての解明に焦点が注がれている。社会主義及びポスト社会主義の状況下にあるトナカイ飼育を説明するために、社会主義農業政策のなかで用いられてきた用語——生産牧畜 (production nomadism)・職業牧夫 (雇用牧夫)・ブリガーダ (家畜飼育作業班)・コルホーズ及びソフホーズほか——を人類学の領域に取り込もうとすべく様々な角度からの検討が行われている。私自身こうした研究の方向性は正しいと考えている。



その一方で、これは自己反省もふまえたことであるが、研究者の関心がやや限定的なものではないかと考えている。というのも蓄積されつつある研究が、放牧地での直接の参与観察及びトナカイ飼育に何らかの形で関わる人々からの聞き取り調査から得られる民族誌資料を下にした分析に集中しているからだ〔池谷1999; 高倉2000a; 吉田1998; Anderson 2000; Fondahl 1998; Golovnev & Oshrenko 1999; Gray 2000; Ikeya 2001; Klovov 2000; Konstantinov 1997; Yoshida 2001〕。

しかしながら、より適切な民族誌の描写を行うために必要だと私が最近感じるのは、職業的トナカイ牧夫の文字通りの人口は少なく、多くの先住民は村落の住民として別の仕事に就いてきたという事実を忘れないことである。先住民にとってこの「別」の職とは、トナカイ牧夫職やソフホーズの幹部職と同様に、行政指令システムに組み込まれた一末端であり、失業者が不在といわれた社会主義体制にあって国家から提供・分配される仕事 (raspredelenie) として、同列に位置づけることが基本的な前提であると考えるからだ<sup>(3)</sup>。この認識が切り開く視点が不在畜群所有に関わる諸問題なのである。すなわち、放牧地で労働する牧夫・国営(集団)農場の幹部・さらに村で定住的生活を送るそれ以外の先住民の三者が、それぞれどのように家畜所有・利用に関わってきたのかという文脈を研究対象として設定することである。そのうえで社会主義からポスト社会主義にいたる文化的・社会経済的変容の含意はどのようなものであるのか——という問いである。

前節でのべたように、1930～40年代の集団化と定住化こそがシベリア先住民社会における伝統的遊動牧畜を大きく変容させた。さらに付け加えれば、1950～60年代の大規模行政村落への強制的移住とコルホーズの拡大＝ソフホーズ化も重要である〔Fedorov 1997:239; Vakhtin 1994〕。こうした諸政策の実行に伴い、地方の行政構造は細々とした単位からより巨大で単純化されたものへと変化した。そうした一連の諸要素がもたらしたのは、先住民が定住的な比較的大きい行政村落に集中して暮らすようになったことであり、その行政村落の中心的生産部門はソフホーズが担うという体制であった。さらに親以上の世代から子供世代を分離して教育・生活させる寄宿学校制度の整備によって、若い世代は伝統的な生活にかわる「ソビエト」生活様式により適応する傾向が強まった。こうした状況が形成される中で、多くの先住民は行政村落において定住したまま就ける職を選ぶようになり、その結果、遊動生活をともなう家畜飼養の職は人々が選択可能な職の一つになっていったのである。

社会主義体制下における社会保障・物的補給サービスを背景にして人々の生活は、自律的な充足よりもむしろ、ソフホーズあるいは村落役場から支給される食料及び工

場生産品に頼る依存度が次第に高まっていった。これは伝統的生業に類似した畜産業や毛皮獣狩猟業に就いた者として例外ではない。職業牧夫に就いた場合、専ら家畜群の放牧に費やすことが求められ、伝統的な意味でのトナカイ飼育の実践に、副次的に組み込まれていた漁労や狩猟活動に割く時間的余裕はなくなったのである。ソフホーズは、放牧地・牧夫の労働組織そして遊動のあり方についても厳密な管理体制を敷いた。それゆえに温情的な近代化の圧力の下に、1960年代までには、狩猟者及びかつて遊動的生活を送っていたトナカイ牧民双方の自由な移動性は完全に喪失されたのである [Krupnik 1998:231-235]。もはや伝統的な遊動牧畜は存在せず、その代わりに温情的な集団化された畜産業があるだけだった。

私がかつて調査した北部ヤクーチアの文脈に引き寄せていえば [高倉2000a:121-126]、ソフホーズはトナカイ飼育・牛馬飼育・干し草確保及び農耕といった農牧用地 (proizvodstvennyi uchastok) を利用種別にあわせて空間を分断し、それぞれの生産部門に対して必要とされる面積をあてがった。トナカイ飼育の場合、そこにあてがわれた放牧地全体をさらに細かく分断・領域画定し、それぞれ約2000頭前後の家畜が飼育できるように整えられた。この細かく領域化された放牧で家畜の放牧作業にあたるのが、プリガーダ (家畜放牧作業班) である。このプリガーダの責任者及びメンバー構成の最終決定はソフホーズの管轄だったのである。職業牧夫は村で暮らす自分の家族から離れ、放牧地において家畜と共に移動する遊動的生活をおくりながら、放牧作業を行うようになった。こうした体制が完成するのは1960年代であるが、このときには土地はもちろんのこと、家畜もそのほとんどが国家の所有下におかれていたのである。

家畜と農牧用地、職業牧夫・ソフホーズ・村落住民といった生産諸関係において、最も強い力があり、様々な意味で意志決定をおこなってきたのが不在畜群所有者の代理人すなわちソフホーズ幹部であった。彼らは村落におかれた事務所において、国家の生産計画・法規に準じながら、家畜の処分すなわち屠殺と販売を決め、家畜群と放牧地を管轄し、村落住民の中から職業牧夫を雇用し、プリガーダと呼ばれる家畜放牧作業班への配置を決定した。なお、1960年代以降においても私的 (個人) 所有の家畜は限定的であるにせよ認められていたのは事実である。牧夫は労働に必要な騎乗・牽引のための役畜トナカイを、また自ら自家消費するために一定数を所有していた。また村落に定住する先住民の多くも、自家消費のために数頭の家畜をもっていた。ある意味で、後者の人々を放牧地に不在の家畜所有者と呼ぶことも可能であろう。とはいえ職業牧夫及び村落に暮らす人々双方において所有できる家畜は数の上で限定的であり、また両者の保有する家畜は、それ自体で私的な群れを形成させられることはなかつ

た。それらは、ソフホーズの管理下にある公トナカイの群れに合流され、ブリガーダで働く職業牧夫の管理下にあったからである。牧夫達は家畜管理においていくつかの点で自ら主導的な役割を果たすことができたが、それらはあくまで放牧地における群行動管理 (herding) と生殖管理 (husbandry) に限定されていた<sup>(4)</sup>。牧夫の主導性とソフホーズ幹部のそれはいくつかの点で重なり合うことがあるとはいえ、基本的には別種のものであり、さらに後者が前者に対して強い影響力を行使するという関係だったのである [Takakura 2002:16-17]。

ここでポスト社会主義下のシベリアの文脈に適した、「不在畜群所有者」概念に関連したいくつかの定義付けを行いたい。本稿の民族誌的資料を分析する際に用いられるのは、第一に「不在畜群管理者 (absentee herd manager)」である。これは、個人であれ組織であれ、畜群の構成について決定する責任をもつと同時に個々の家畜の処分権を実行する行為主体であり、通常は自らの家畜がおかれている放牧地には不在の人々を意味する。ちなみに、不在畜群管理者は法的な意味で家畜群を自ら所有しているかどうかは問題ではない。二番目の定義づけは、「不在家畜所有者 (absentee livestock owner)」概念である。不在家畜所有者は、放牧地に不在であると同時に、群となっていないかどうかとは関わりなく家畜を所有し、家畜の日常的世話については基本的に牧夫に任せる人々である。このような二つの概念を設けたのは、ソ連時代のソフホーズにおける家畜及び家畜群の所有者は国家であって、ソフホーズそれ自体ではないからである。彼らはいわば国家の代理人、あるいはそのような性質をもつ社会的制度・団体であり、そのことを考慮し、私は「不在畜群管理者」という概念を見いだした。またソ連時代にも限定付きながら許されていた私的所有の家畜、この所有者のほとんどが放牧地にはいない村落住民であることから「不在家畜所有者」を概念化した。

ソ連崩壊後、私的所有の制限が緩和・撤廃される中で個人の家畜所有数及び牧夫の数は著しい増減が見られるようになった。1990年代以降のシベリア先住民社会は、ロシア経済の不安定な状況の中で村落を離れ、放牧地において家族・親族を中心とした遊動的生活を再び始める人々が現れる一方で、そうした選択をせずに村落にとどまる或いは都市に出稼ぎにでるといふ二つの傾向を見ることができる。それ故に「不在家畜所有者」概念は、現在でも適応可能である。「不在畜群管理者」達は、ソフホーズ及びソ連崩壊後に継承・新設された生産団体 (productive corporation) において経営職を担う人々であるが、彼らはまたそれぞれの村落コミュニティにおいて、顔のある特定の個人として見なされていることに注意する必要がある。こうした人物達が組織・団体の代理人・執行部として様々な物事をやりくりし決定するわけだが、その彼らの

行動及び結果は当該村落コミュニティにおける人間関係に直接影響する。その意味でいえば家畜飼養をめぐる文化的・社会経済的文脈は、上記に定義した不在畜群管理者・牧夫・不在家畜所有者内の関係、およびこの三者の外部世界との関係——ソ連時代は行政指令、現在は市場の圧力——によってつむがれるものなのだ。

ソ連崩壊後、先住民の家畜飼育産業に対する温情主義的体制もまた停止した。さらに私有財産に対する規制がほぼ撤廃されたこと<sup>(5)</sup>が加わってもたらされた最も大きな影響は、社会主義体制下で確立された不在畜群管理の性質と秩序に対してであった。ソフホーズの不在畜群管理者に集中していた力はゆるまり、彼らの社会的地位もまた低下した。その一方で、放牧地で働く牧夫や個々の不在家畜所有者たちには逆の結果がもたらされたのである。ソフホーズ（コルホーズ）を継承するさまざまな家畜飼育関連生産団体が立ち上がりと同時に、経営がうまく行かず倒産する事業体も出現するという現象が現れることとなったからである。こうした新しい生産団体は、先住民・非先住民を問わず現行ロシア連邦法及びいわゆる地方自治体などによって法的に定められており、大きく三種に分類できる [Nefedova 2002:7; 山村1997]。第一に、コルホーズ・ソフホーズをそのまま継承したようなある一定の規模をもつ団体組織（集団生産経営体 [kollektivnoe proizvodstvennoe khoziaistvo]、農業企業体 [agrofirma]、協同組合 [kooperativ] 等）である。二つ目は、家族や友人など数世帯を中心に営まれる小規模な経営団体であり、この中には小規模な農業・畜産経営組織である「農民経営体」(krest'ianskoe khoziaistvo)<sup>(6)</sup> やトナカイ飼育や狩猟・漁労など先住民の伝統的生業を行うための経営組織「氏族共同体」(rodovaia obshchina)が含まれる。最後は、事業体とは正確には言えないが、統計などで上記の団体経営に比して並べられる「個人副業経営」(podsobnoe lichnoe khoziaistvo)である。これは個人の住宅の庭等に設けた畑での栽培や数頭の牛豚などの家畜飼養を行う小規模な農業生産を意味している。現在、その生産物の処分についても個人に認められており、これは社会主義体制下にあったのはほぼ唯一の私的生産部門であった。農村に住む者はほぼどんな職業についているものであれ、何らかの形で営んでいるものである。以上の新しい（最後の単位は新しいものではないが）経営単位の存在は、単に放牧地や畜群構成についてだけでなく、牧夫・不在家畜所有者・不在畜群管理者の間の社会関係及び委託関係にまで影響を及ぼしている。こうした三者の相互関与・関係のあり方の変化のあり方をまとめるならば、かつてこの三者の間に形成されていた不在畜群管理者をトップとする村毎の垂直的な構造が崩壊し、多村間また都市との関係もふまえた相対化され多様化した水平的構造へと代わった——ということができらるだろう<sup>(7)</sup>。

## 4. ヤクーチアにおける馬飼育

### 4.1. 半遊動的な生活様式と伝統的牛馬飼育の変容

これまで述べてきたトナカイ飼育研究の枠組みは、ほぼ同様にサハ共和国の馬産業をめぐる状況にも当てはめることができる。馬飼育における牧夫・不在畜群管理者・不在家畜所有者及び放牧地と定住村落の関係は、基本的にトナカイ飼育のそれらの諸関係と同じものであるからだ。この地域において馬は畜舎或いは囲いについた放牧場において飼われるわけではない。タブン (tabun) とよばれるいわば種牡を中心とするハーレムである馬群がいくつもつくられ<sup>(8)</sup>、放牧地において周年放牧 (kruglogodovaia tebenevka) されるからである。職業的馬牧夫は家族を村落に残し、放牧地に設置された丸木小屋<sup>(9)</sup>において遊動的な生活を送りながら、馬群の行動管理に従事する。旧ソフホーズはこうした馬群の最も重要な不在畜群管理者であり、また数頭の馬を所有する村人は、不在家畜所有者なのである。

ここで、サハ人と馬飼育の関係について歴史的状況もふまえて簡単に描写しよう。チュルク系言語集団に位置するサハはレナ川を中心とするシベリア東部の広範域に暮らす民族集団である。19世紀の帝政ロシアにおける植民地行政は、彼らを遊牧民 (kочевые инородцы = nomadic natives) として登録している [IYaA 1957:168]。その主要な生業は家畜のための草刈りを伴う牛馬飼育、さらに副業として狩猟や漁労であった<sup>(10)</sup>。サハは夏と冬の住居をもち、生業活動の必要に応じてそれらの間を移る遊動的な生活様式であった<sup>(11)</sup>。17世紀以降のロシアの歴史資料においては、サハは「馬の人々 (konnye liudi = the horse people)」として記述されていたが [Tokarev & Gurvich 1964:248]、植民地行政の影響が浸透するにつれて、彼らの生活における社会経済的側面は変わっていった。18～19世紀において馬に代わり牛飼育が重要性を増したことで、社会的階層化が強化され、それと同時に草刈り地の保有に私有の傾向が増加したのである。ある研究によると、ロシアの植民地化以前に馬の保有量は牛の4～5倍だったが [Jordan & Jordan-Bychkov 2001:46]、19世紀を通してその比率は逆転し、牛が馬の数倍になったと指摘されている。1917年の統計では、中央ヤクーチアのサハの一世帯あたり9.3頭の牛を保つ一方で、馬は2.4頭であった [Jocheson 1933:190]。こうした傾向が示唆するのは、彼らの生活に遊動性よりも定住性のほうが強まったことである。というのも、定住的な条件において一定の土地区画を必要とする草刈り作業――

牛飼育はこの作業を必要とし、馬飼育はこれを周年放牧であって草刈りを必要としないからである [Gotovtsev 1995: 4; Ivanov 1966:202; Ivanov 1992; Tokarev 1945: 189]。

19～20世紀初頭における中央ヤクーチアのサハの牧畜と生活との関わりについてすでに多くの歴史的研究が行われている。当時彼らの間で最も一般的な住居用建造物は、丸木小屋バラガン (balaggan) に家畜小屋はホトン (khoton) を組み合わせたものだった。これ以外に、19世紀末には使われなくなる円錐形の恒常家屋ウラハ (ulaha)、また必要に応じてその場で作られる草による円錐形住居 (otuu) などがあった。こうした建造物を設置した場所については二つの居住概念があった。一つは恒久的居住地で、これは家族や隣人を意味するサハ語に由来する「ウアル (yal)」と呼ばれものである。恒久的居住地には季節に応じて用いられる三つのタイプが存在した。冬居住地 (kystyk)、夏居住地 (sajlyk)、秋居住地 (otor)<sup>(13)</sup> である。もう一つは一時的な住居で、草刈りや狩猟・漁労といった季節的に行われる生業活動に従事するためのものである。ちなみにこちらには前者の「ウアル」に相当する総称概念はなく単に具体的な名称が知られているだけである。例えば、草刈りのための居住地 (otuu)、草刈りの場 (otchuttar)、狩猟小屋 (bulchut iuteene)、バラガンの場 (sir baragana) 等といった具合である。双方のタイプの居住とも、川岸の低地あるいはアラースと呼ばれる地形に設置された。ちなみにアラースとは中央ヤクーチアに独自に見られる熱的カルスト地形で、中央部に湖沼をもつ草地である<sup>(13)</sup>。

サハの生活における遊動性は、家畜を伴う移動である夏居住地と冬居住地という恒久的の住宅間を軸に展開し、それらの間の距離は数キロメートルから十数キロメートルであった。これに季節に応じて必要な生業活動に応じて遊動性が加わった。例えば6月末～7月にかけては恒久的の居住地である「夏居住地」から、臨時的住居の一つ「草刈りのための居住地」に赴きそこで一定期間作業に応じるというものである。一時的住居は年によって利用・不利用がかわり、特に草を材料に建てられる円錐型住居 (otuu) は毎年・場所によってつくられた。こうしたことから彼らの生活様式は遊動牧畜というよりも、半遊動性の牧畜社会と位置づけることが可能である。

一般的に、冬居住地の場には数家族 (kergen/yal) のみが暮らし、夏居住地は家族数が多かった。20世紀初頭の統計資料によると、中央ヤクーチアの冬居住地の平均人口は20人だったという。19世紀を通して進行したサハの定住化傾向は、冬居住地に近接した場所に草刈り地 (khoduha) を設置する傾向を強化することになった [Fedorova 1998: 31; Zykov 1986: 13-15]。こうした生活条件は馬飼育よりも牛飼育により適したものであった。

彼らの間には家畜飼養のやり方について二つの手法つまり畜舎飼と放牧があった。牛が畜舎飼いの対象で、上記に挙げた夏と冬双方の恒久的居住地に建てられた木造住居バラガンにはホトン (khoton) と呼ばれる畜舎が付設・併設していた。牛は24時間畜舎にいたわけではない。日中は放牧され、夜は畜舎に戻っていた。牛の放牧については朝、家畜所有者が自分の畜舎から牛を追い出すだけで、牧夫がついて群の行動管理をおこなうということはなく、夕方になると牛は自ら畜舎に戻ったのである。冬の時期には人が夏に集めた草が牛たちの飼料となった。一方こうした方法は馬には用いられず、彼らは馬群にまとめられ、これを単位として周年放牧にされた。馬群とは種雄一頭に、複数の牝馬が寄り添ういわばハーレムである [Alekseev 1997:72; Tokarev & Gurvich 1964:248-249]。先に提示した1917年の統計資料において一世帯あたり馬の所有が2.4頭であったことを考慮すると、多くの場合単一の馬所有者が一人で馬群を構成することはできず、より複雑な状況であったことが推測できるだろう。

他のシベリア先住民と同様にサハもまた1930年代の集団化とそれに続く1960年代の大規模行政村落への強制移住を経験している。私自身による面談調査の結果からは次のように彼らの経験をまとめることができる。概ね1950年代までの状況としてサハの多くはコルホーズで働いていたが、そのコルホーズは伝統的な冬居住地のある地点あるいは小さな村落に設置されそこで暮らしていた。1960年以降は、コルホーズが統合されてきたより大規模なソフホーズで働く一方で、それらはかつて存在した村落(冬居住地)の統廃合をとまなうものであり、より大規模な行政村落に付随してつくられ、人々はそこに暮らすようになった。新たに形成された生活状況は、基本的には社会主義体制崩壊後の今日まで続いている。そうしたなかで、前節で述べたような職業馬牧夫、不在畜群管理者としてのソフホーズ、そして多くの不在家畜所有者としての村人という馬飼育をめぐる組み合わせが現れたのである。

サハ文化と馬の結びつきを挙げると、例えば民俗暦においては3月後半から4月前半は「仔馬を捕える月 (kulun tutar)」と呼ばれていたし、有名な馬乳酒祭も存在した。また馬は社会的・宗教的なシンボルとしても意味をもっており、婚資や供儀に用いられたのである [Tokarev & Gurvich 1964:276; Jochelson 1933:106, 松園1967]。しかしながら、土地・家畜の所有及び牧夫の職業化など社会主義体制下での根本的な変容の中で、馬の存在自体がサハ人の生活との結びつきがかつてのそれと比べて弱めていったことは事実である。

その一方で、伝統的な二つの家畜飼養の方法である牛が畜舎飼いで馬は周年放牧というあり方は基本的に変わることはなかった。行政村落周辺に広がる放牧地において、

職業馬牧夫は村に暮らす家族と別れ、成人男子を中心とするブリガーダを遊動単位として働いたからである。獣医学及び家畜飼養に関する生物学の知識・技術が導入されるなど全く変化がなかったわけではない。とはいえ、馬群を中心とする馬の群れが伝統的居住地であれ、行政村落であれ、要するにそれらから遠く離れた放牧地において放牧するというあり方は継続したのである。ちなみに牛飼育においても状況は同じだった。ソフホーズが管轄する大量の牛には村落内に巨大な畜舎が設けられ、一方数頭の牛を所有する個人世帯は村落の自宅敷地内の小さな囲いと畜舎を設けたからである。初夏の草刈り作業で集めた草を冬に与え、牧夫なしの放牧というパターンも変わることがなかった。

#### 4.2. 馬飼育関連農業政策と統計的事実の示唆

ソ連末期の1989年に発行された『ヤクート自治共和国農業アトラス』によると、当時農業生産の86%は家畜飼養が占めていた。これは単にこの地域の寒冷さという生態学的条件<sup>(14)</sup>というよりは、むしろそれを加味して策定されたソビエト政権初期の農業政策に負っている。そこでは主要産業として家畜飼養が、次いで農業がおかれ、狩猟と漁労は副次的な位置づけがされたからである。現在見られるような共和国の馬飼育産業の形成・展開において強い影響をもった行政上の決定は二点ある。第一に、1943年に共和国内ベルホヤンスク郡 (raion) の9つのコルホーズにおいてヤクート馬種付けセンターがつけられたことである。これによって、サハ人が伝統的に飼育してきた馬種を混血させず保存させるという行政的な方向性が確立された。第二に、1963年3月19日におけるヤクート自治共和国最高ソビエトの決定として「馬群 (tabun) の方法による肉生産中心の馬飼育の発展」が決議されたことである。いわゆる畜舎が設置された牧場形式の飼育ではなく、馬群による周年放牧の方法の継続・発展が基礎づけられた<sup>(15)</sup>。この二つは、サハが継承してきた馬種と馬群による周年放牧が社会主義経済生産体制において明確に包摂されたことを意味している。とはいっても変化がなかったわけではない。群管理のための畜産学的・獣医学的技術と知識が導入され、馬群の理想的頭数を20~30頭とすることや、妊娠した牝馬の保護、冬期に仔馬に対して行われる飼料供給といった特別な世話、さらに選別と屠殺のための設備の建設といったことが行われるようになった [Atlasov 1992: 3, 87-88; Gotovtsev 1995: 52; Korotov 1989: 109]。1950年代以降、専門家によって与えられた助言のなかには、全体の保有頭数において牝馬の割合を55%以上に維持すること、毎年出生する仔馬に応じて屠



殺比を決めることといったことも含まれていた。これらの二種類の助言をもとに、飼育される馬の性年齢を加味した理想的な群の構成モデルさえつくられている [NPOYa 1993: 3-6]。こうしたさまざまな農業・畜産政策のそれぞれがソフホーズによって具体的に実施され、サハの馬飼育のあり方に強い影響を及ぼしたのだった。1960～1980年代において、ほぼすべての村にはソフホーズあるいはその支部事務所が設置されており、農村部に住む住民にとっては自らの隣人として不在畜群管理者がいたことを意味している。

人口統計資料は、職業牧夫と村人、不在畜群管理者の関係を理解する上で一定の示唆を与えてくれる。というのも、社会主義時代サハ人の圧倒的多数は農村部に暮らしていたからである。1926年の統計ではサハ人全体は230,990人であり、このうち97%は農村人口で、都市人口は3%でしかなかった。ソ連末期の1989年には全体の人口は365,236人と増えたが、農村人口は74.3%、都市人口は25.7%とその多くが農村部に暮らしてきたことを示している [Ignat'eva 1994]。残念ながら、ヤクーチア全体における職業牧夫の人口が何人であったのか具体的な数字はない。とはいえ、考慮しておく必要があるのは通常馬飼育に従事するブリガーダは5～6人の職業牧夫によって構成されていたことだ。ある研究が示しているのは、一人の牧夫が何頭の馬の行動を管理すべきかというもので、それによると成長した馬なら一人あたり90～120頭、若馬なら120～140頭、仔馬については50～60頭である [Gotovtsev 1995:38]。要するに、職業牧夫の数はそれほど多くは必要とされないわけである。私自身の現地調査による資料を見てみよう。中央ヤクーチアのメギノ・カンガル郡タバガ村では、1999年時点で村人口は1220人、383世帯であった。村にある旧ソフホーズ系企業は当時次のようないくつかの部にわかれ、それぞれの勤務者は次のようなものだった——中央管理部13人、馬飼育部16人、建設部7人、牛飼育部52人（夏期の臨時雇用が20人、冬期は2人が加わる）、小型毛皮獣飼育部8人、穀類耕作部14人、運転と車庫管理部19人。この旧ソフホーズは455頭の馬を所有し、これを二つのブリガーダにわけ、そこでの職業牧夫はそれぞれ6人だった。村人口1220人のうち実際に働いている職業牧夫は12人つまりわずか1%しかいない。彼らをのぞく大部分の村人は不在家畜所有者となりうるわけである。

社会主義時代の家畜所有については法的な私的所有の制度の存在にもかかわらず、農村部の住民の多くは自らの家畜を所有していた<sup>(6)</sup>。ある研究では20世紀中葉において農村部のサハは63%が一頭の雌牛を、32%が2頭だったと指摘されている [Jordan & Jordan-Bychkov 2001:73]。20世紀のロシアにおける農業政策について概説したメド

ヴェージェフ [1995] の研究によると、1970年代にヤクーチアを含めいくつかの特別な地域においては一頭の馬をそれぞれの世帯が所有することは認められていたという。さらにソ連邦内のロシア共和国最高会議は1982年にはすべての市民に対して家畜の個人による所有を認める決議を行っている。北部ヤクーチアのエヴェノ・ピタンタイ郡内のバタガイ・アリタ村において私が集めた資料も上記の示唆を裏付けるものとなっている。1994年当時村の人口は1734人、627世帯で、旧ソフホーズ系企業は785頭の馬を飼育していた。それぞれ3人と5人の職業牧夫から構成される二つのブリガードによって群の管理されていた。また627世帯のうち148世帯では合計229頭の馬を私的に所有しており、その平均頭数は2～3頭であった。これはソ連崩壊後の数字であるが、村人によればソ連時代も同様だったという<sup>(17)</sup> [高倉2000a:217, Takakura 2002:5]。

約10年となるポスト社会主義期の政治改革の波の中でさまざまな変化が生じた。ソ連崩壊後ヤクーチアの農業生産は馬飼育を含め、総じて大幅に低下した。サハ共和国統計局による公式資料によれば、(畜産も含む) 農業関係労働者の数は1992年の65,000人から1998年には47,400人と約28%減少した [RSTs 1999: 32]。1992年に共和国において馬の総数は210,000頭だったが、1997年には140,000頭となり、33.3%の減少である [Ivanov 2000: 3; Mateev 1999:220]。表1を見てほしい。これはサハ共和国における馬の所有関係の動態を示したものである。1990年において、政府関連部門は全頭数の84%を所有していたが、1997年には50%をわずかに超えるほどにまで急速に減じている。一方、民間部門は1990年の15.8%から、1997年には47.4%と急速な伸びを見せている。民間部門内部に含まれる個人世帯(個人副業経営)の所

表1 サハ共和国における馬の頭数と所有関係

経営型 / 年及び頭数 (%)	1990		1997	
	頭数	%	頭数	%
官営部門	167,900	84.2	65,800	52.6
農業企業体	164,900	82.6	64,000	51.2
副業経営	3,000	1.5	1,800	1.4
民間部門	31,600	15.8	59,200	47.4
個人副業経営	31,600	15.8	40,600	32.5
農民経営体	—	—	17,000	13.6
氏族共同体	—	—	1,600	1.3
合計	199,500	100.0	125,000	100.0

出典:Ivanov2000:28

有する馬は、1990年の15.8%から1997年には32.5%へと増加している。1990年の民間部門の割合と個人世帯の割合が一致するのは、ソ連時代、民間部門として唯一個人所有をゆるされていたのがこの範疇だけだからである<sup>(18)</sup>。ソ連崩壊後、民間部門としてあらたに法的範疇として認可されるようになったのは、農民経営体 (krest'ianskoe khoziaistvo) と氏族共同体 (rodovaia obshchina) であり、1997年においてはそれぞれ13.6%、1.3%の割合を占めるようになった [Ivanov 2000: 28]。

これまで指摘したように馬飼育は、定住村落から離れた放牧地において馬群による周年放牧によって飼育される。それゆえに土地と馬飼育の関係についても見ておこう。現サハ共和国の大きさは3,103,200平方km (1998年時点で人口は約100万7千人) でインドより若干小さい面積であるが、その22.9%つまり70,722.3ヘクタールが農牧用地として用いられている (1995年)。現在農業用地と放牧用地のそれぞれの具体的面積について筆者は資料をもっていないが、1995年時点においてそれらを合わせた農牧用地とこれを所有するさまざまな経営単位の関係を示したものが表2である<sup>(19)</sup>。最も驚くのは全農牧用地の65.9%が氏族共同体によって占められていることである。「国立農場 (Goskhozy)」「集団的経営体 (kollektivnye predpriiitia)」として表2に掲載された集団企業はかつてのソフホーズを引き継いだ主な経営型であるが、それらは30%の割合でしかない。これら三つのタイプの経営型で農牧用地の95.9%とその大半を占めていることがわかる。社会主義時代、農牧用地のほとんどはソフホーズによる管轄

表2 サハ共和国における生産用地所有と経営型 (1995年)

経営範疇	用地面積	
	千ヘクタール	%
農業協会	48.0	0.1
集団企業	511.8	0.7
国立農場	17012.2	24.1
(ソフホーズ内訳)	(14732.1)	(20.8)
集団的経営体	4459.8	6.3
副業経営	1690.3	2.4
氏族共同体	46572.0	65.9
農民経営体	152.6	0.2
個人保有	210.4	0.3
その他企業	65.2	0.1
合計	70722.3	100.0

出典:Matveev,1999,p.20

(国家所有)であったことを考慮すると、土地の所有関係はその所有主体が多様化するとともに、大きく変動したことが読みとれるだろう。1995年の時点で、サハ共和国には54のソフホーズ、164の集団企業、12の農業経営体、4つの種馬飼育場(konezavod)、114の氏族共同体、3638の農民経営体という農牧経営団体が存在し、これに農牧業を副業として行う個々の世帯が加わるわけである [Mateev 1999:18-21]。

ここまでの資料と前節までの議論をふまえながら、社会主義期からポスト社会主義期に至るヤクーチアにおける馬飼育の全体像をまとめてみよう。独占的な不在畜群管理者と少数の職業牧夫、そして定住生活を送る無数の不在家畜所有者という組み合わせが、かつてはどの村においても見られた。ソ連の崩壊後のソフホーズ・システムの崩壊とその変容そして各村落におけるその社会経済的影響は、何よりも上記の三者における序列と相対的な力関係のあり方に及んだのである。ソフホーズの民営化は無数のさまざまなレベルの経営主体——農牧経営団体から家族ビジネスまで——の創設(と倒産)をもたらした。新たに出現したこれらの経営単位は、必然的にみずからの主要な生産ターゲットをどれに絞るか——牛飼育あるいは馬飼育(肉畜ないし乳製品の生産)、トナカイ飼育(肉畜生産)、農業等——をめぐってその経営戦略を自ら選択するようになった。こうしたなかでソフホーズにおける不在畜群管理者の独占的な性質はより開かれたものへと変化した。確かに旧ソフホーズ系の集団企業は、職業牧夫と群の管理をも継承したが、例えば農民経営体<sup>(20)</sup>といったいわゆる家族ビジネスによる経営単位もまた群管理を引き受け、さらに独自に牧夫を雇用する状況が始まったのである。この経営単位の多様化は新しい状況をもたらした。というのは、不在家畜所有者あるいは職業牧夫のなかには、自ら畜群を管理する、ないし不在畜群管理者となる場合が出てくるなど、牧夫と村人によって選択しうる社会経済的選択肢は増加したからである。社会主義時代、村から離れた放牧地において群管理に従事できたのは唯一職業牧夫であったが、現在ではアルバイト牧夫(part-time herders)すら出現している。もちろん牧夫を雇う経営者もまた多様化していることは言うまでもない。不在家畜所有者についていえば、かつてその大半は農村部の村に暮らす人々であったが、現在では都市部にすむ者も加わるようになった。新旧双方の不在家畜所有者は自ら所有する馬の管理とどの牧夫に管理を任せるかの選択においてより敏感になった。このことが示しているのは、不在畜群管理者、牧夫、不在家畜所有者の関係がかつてのそれよりも複雑になりつつあることである。

## 5. 生産団体による馬飼育経営と仔馬肉をめぐるサハの食文化

社会主義体制における農業生産部門の一つとして位置づけられた馬飼育は、単に肉や馬乳酒クムスの原料となる乳だけが利用されてきただけでなく、皮は衣類や絨毯、そして冬期における車用の防寒カバーなどとして用いられてきた。馬肉の値段は牛や豚よりも安価であったが、それは馬が飼料を必要とせず、周年放牧下で飼育されていたからである [Gotovtsev 1995:6]。近年、サハ文化における馬の象徴的意味は再評価されるようになった。民族文化の再生・復興に対応して、馬乳酒祭がより数の上でも規模の上でも拡大して行われるようになったことはその現れである [高倉2003]。また現在のサハ共和国農業省では、馬肉生産及び馬乳酒クムスの質と量の上での増産を奨励している。秋が季節である仔馬肉を食する習慣は、社会主義時代も含めて多くの人々が楽しみにするものであった。前節まで述べてきたように、このポスト社会主義下の10年においてみられる生産団体及び土地・家畜の所有関係に関する移行期の状況は、単に旧ソフホーズの幹部職に関わる人々だけでなく、むしろ都市・農村にくらす一般の人々に対して、秋の仔馬食文化に関わる新たな選択と可能性を提示することとなった。それは、都市住民であろうと農村住民であろうと、自らが望めば不在家畜所有者となり、家畜を委託することが可能となったからである。かつて不在家畜所有者は自らの馬を、自らが暮らす村に位置するソフホーズに委託するというのが原則であった。したがって、家族や親戚、よほど親しい友人がいない限り都市住民が不在家畜所有者になることは希だった。しかし家畜の所有に関する制限がなくなった現在、人々は自らの家畜を、自らのすむ村内外において存在する多くの不在畜群管理者あるいは直接牧夫に対して委託することができるようになった。不在家畜所有者に関わるこの新たな状況を理解するためには、現在における彼らの仔馬食文化のあり方及び馬の購入の方法、さらに人々によって日常的に行われる委託関係について検討することが必要であろう。

1990年代中葉において共和国の肉生産総量の20～22%を馬肉生産が占めている。年ごとの平均屠殺量は35,000～40,000頭で、肉量は10,000～11,000トンに及ぶ。生後5～6ヶ月の仔馬肉が馬肉生産の主たる割合を占める [Gotovtsev 1995: 5]。2000年2月15日に共和国農業省内に保管された資料によると、2000年1月14日現在、ヤクーチアの馬の総数は125,486頭おり、このうち71,257頭が牝馬である。農業省の予測ではこの年の春、新たに48,472頭の仔馬が生まれ（年間平均出生率は68.0%）、そ

のうち労働者に対する現物支給も含め30,598頭が屠殺される予定であると記されている。農業省は購入による増加, 病死や補食などによる減少を考慮し, 2000年末には総数129,860頭の馬が翌年に残ると推定している<sup>(21)</sup>。

表3 1999年における馬の収支

生産団体		エレル	アルグス	index
1999年1月現在種牡頭数		41	62	a
1999年1月現在牝馬頭数		439	419	b
1999年仔馬の増加	出産	オス 140	174	c
		メス 146	153	d
1999年仔馬の増加	購入	オス -	-	e
		メス 60	50	f
1999年馬の消費	仔馬販売 (屠殺)	オス 130	166	g
		メス 25	90	h
仔馬以外の販売 (屠殺・販売)		89	40	i
出産比*1		65.1%	78.0%	j
消費個体における仔馬屠殺比*2		63.5%	86.5%	k
1999年における増加仔馬における屠殺比*3		44.8%	68.1%	l

$$*1 = (c+d) \div b \times 100$$

$$*2 = (g+h) \div (g+h+i) \times 100$$

$$*3 = (g+h) \div (c+d+e+f) \times 100$$

当歳の仔馬の屠殺比は年によってさらに生産団体によって異なっている。具体的な状況出産と消費(屠殺)の関係については、いくつかの旧ソフホーズ系の生産団体の資料を提示することによってその一端を見てみたい。表3はタツタ郡の生産団体「エレル」、アビイ郡の「アルグス」における1999年の状況をまとめたものである。屠殺及び他の生産団体への譲渡も含めた総消費の内、当歳馬の屠殺比はそれぞれ63.5%、86.5%となっている。通常当歳馬は秋に屠られる。当歳馬以外の馬の消費は、老いた種馬、牝馬、その他の馬の屠殺及び他の団体への譲渡である。他の団体からの購入も含めて当歳馬の増加率は、それぞれ44.8%、68.1%である<sup>(22)</sup>。例えば「エレル」の場合、439頭の牝馬が、286頭の仔馬を出産し、そのうち140頭は牡で、146頭が牝であった。当歳馬286頭のうち、155頭つまり51.4%が屠られたのである。消費された当歳馬の性比率をみると、140頭の牡のうちその大半の130頭が、146頭の牝についてわずか25頭であった。こうした数字は常に一定ではなく、その年の出産の状況と生産団体の経営上の戦略によって変化することはいうまでもない。これらの資料から導き

出せるのは、馬肉の消費が仔馬を中心としており、しかも屠られるのは牡の当歳馬だということである。私が現地調査を行っているメギノ・カンガル郡タバガ村のバイカロフという名称の生産団体の馬飼育部門の責任者によると、やはり平均的な当歳馬の屠殺比を述べるのは年によって異なるので難しいと前置きした上で、おおよその目安としては、当歳馬の40%が屠殺対象であり、そのなかの性比率は3対1で牡が多いと言うことだった。

ところでサハ人はいつ馬肉を食するのだろうか。現在彼らの間では、職業牧夫を別にすると、日常的に馬肉を食しているわけではない。多くの住民にとって馬肉を食べるのは年二回の特別な機会が中心である。最初は6月末に実施される馬乳酒(クムス)祭であり、次いで秋の仔馬肉の季節である。馬乳酒祭においては、クムスと並んで祝祭用の料理として馬肉が出される[高倉2003]。私が調査したタバガ村の場合、不在畜群管理者である旧ソフホーズ系生産団体(バイカロフ GUP)が自らの馬(老いた成獣)を屠り、これを精肉として販売あるいは料理して祝祭時に提供していた。不在家畜所有は通常の場合、数頭の馬しかもっていないので、彼らがこの馬乳酒祭の際に自らの家畜を屠ることは希である。彼らはむしろ10~11月の秋に、自ら所有する牝馬がその年の春に生んだ当歳馬を屠り、これを食べるのである。ほぼ例外なくサハ人は当歳馬の肉のうまさを誇りにしており、何らかの形で食べられることを期待している。

彼らが仔馬肉を入手する方法は、おおきく三種類に分けることができる。第一にすでに記述した不在家畜所有者がみずからの当歳馬を屠り肉を入手。第二に家族・親戚あるいは友人間で社会的交換として手に入れる方法である。第三に、市場や店頭で販売されている肉を購入あるいは職場などを中心にした共同購入である。三番目について2000年にヤクーツク市のサイサリ市場を見回ったときには、キログラムあたり60~70ルーブルで仔馬肉が販売されていた。市場の各コーナーには例えば「メギノ・カンガル産」「ナム産」といったように産地が明記される形で並べられていた。店子によると仔馬肉が市場に出回るのは10月はじめから11月を通しての期間で限定されている。この年には私はここ数年ヤクーツク市でも見せ始めた西側風のスーパーマーケットでも真空パック詰めされた仔馬肉を見ることができた。とはいえ、現地の人々にとって通常の仔馬肉の入手は第一あるいは第二のやり方である。家畜の私有が制限なく認められるようになって以降、とりわけ第一の入手方法すなわち不在家畜所有者となり自らの当歳馬を食すというあり方はより身近なものになりつつある。仔馬肉がより簡単に手に入るようになる——このことは不在家畜所有者となる重要な心理的要因である。仔馬肉を手に入れるためにこそ、村人及び都市住民が自ら所有する牝馬を

保有するといっても決して誇張ではないのである。

## 6. 委託関係の実態とその波紋

### 6.1. 牝馬の購入と委託

農村部あるいは都市部いずれの住民であっても自らの馬を欲する場合は、当然であるが馬を購入するか譲渡されなければならない。何度も指摘してきたように、ヤクーチアにおいては馬は馬群 (tabun) として編成され、村から離れた放牧地で周年放牧されている。したがって、牧夫以外の馬の所有者は、不在畜群管理者あるいは直接牧夫に自らの馬の管理を何らかの形で委託する必要がある。こうした取引の対象は通常若い牝馬あるいは直に成熟する若牝馬であることはいうまでもない。その理由は牝馬は毎年仔馬を出産するからである。私自身こうした取引についてヤクーチアの文脈において一般化できたと自覚するまで十分に民族誌資料を収集できたわけではない。とはいえ、聞き取り及び観察調査を通してえられたいくつかの資料を紹介することで、ある種の傾向のようなものを提示することは可能であろう。

ヤクーツクの市立舞踊学校の寄宿舎で当直の仕事をパートタイムでしている女性である V. フェドロワ (1939年生、仮名) は生まれも育ちもヤクーツク市であった。2000年始めに牝馬を買おうと思い、知人が住んでいるヤクーツク近郊のシルダフ村にある「ヤクーツク・ソフホーズ」で試みた。ソフホーズの馬飼育部門の責任者は、妊娠した牝馬なら15,000ルーブル、まだ妊娠していない若い牝馬なら10,000~12,000ルーブルという値段を提示した。加えて、毎年秋に当歳馬を受け取る際には年間の委託料として、1,500ルーブルを支払うようにと言われた。

1945年生まれの N. アレクセエフ (男性、仮名) は大学に勤務する研究者である。彼は自分の出身地であるパブロフスク村 (メギノ・カンガル郡) で牝馬を買うことにしている。購入の際には村の親戚を頼ることになるが、そのとき若い牝馬の値段は6,000ルーブルである。彼が付け加えたのは、この値段が特別に安価であるということだ。通常は牝馬一頭12,000ルーブルはするという。ちなみに2000年のヤクーツク市における平均的労働者の月収は4,000ルーブル程度なので、牝馬の値段は月給の3倍前後となる。彼は、委託料として毎年1,000ルーブルと時折ウオッカの差し入れを知人の牧夫に行っているという。



メギノ・カンガル郡タバガ村の住民からの聞き取りでは、バイカロフ経営体の管理職（不在畜群管理者）及び村人（不在家畜所有者であるかどうかに限らず）双方が提示した牝馬の価格は10,000ルーブル前後で一致した。とはいえ、委託料については、ばらばらで、前述したように毎年決まったお金を支払うという場合以外に、冬期に必要な牛の飼料となる草刈り作業で相殺、草刈り以外の諸々の労働代価<sup>(23)</sup>、当歳馬の肉の25～30キログラムを手渡し、一定の間隔で牧夫にウオッカを渡すといった具合だった。

以上からいえることは、牝馬の販売についてはある程度平均的な価格があるが、委託料については、売り手と買い手の人間関係に左右されるということである。付け加えなければならないのは、タバガ村の住民で聞き取りをしたほとんどが、委託に関して契約文書をつくらない口頭上の同意であり、さらに「委託料」という言葉の使用自体について抑制的だったことだ。むしろ「互いに助け合っているだけだ」という表現が多く聞かれた。

注意したいのは、不在家畜所有者は馬を購入するときに体格や毛色に注目するが、その後は放牧地にいる自らの馬を直接見る或いは見たがるということあまりないことである。例えば、結婚や子供の出産といった祝い事の際に家族や親戚から馬を譲渡され、不在家畜所有者になるといった場合もある。こうした無料の譲渡あるいは親戚・友人関係で安く馬を購入する場合その傾向は一層強い。

1968年生まれでヤクーツク市である政府関係団体で働くT. イワノフ氏（男性、仮名）は、2001年春に母方の叔父から仔馬を譲渡された。これは彼の第一子が生まれたことを記念してである。当の子供はすでに3才になっていたが、出産時に譲渡を約束され、この年になってやっと実現したという。ちなみにイワノフ氏は自分の仔馬が牡なのか牝なのか譲渡されてから3ヶ月近くたった7月初めでも知らなかった。彼によると、もし牡ならば育ててから牝と交換し、牝ならば何年か待てば仔馬肉が毎年手にはいるようになる——と楽しみな様子だった。

上記のイワノフ氏をはじめとして見られるある意味で自ら所有する馬への無関心ともいえる態度は、不在家畜所有者の主たる関心が、毎年自らの牝馬が生む当歳馬の仔馬肉に注がれていることと関連している。時折、村の住民の不在家畜所有者にあっては搾乳するため（馬乳酒自家製造）、不在畜群管理者や牧夫に頼んでその馬が所属する馬群を村近くまでつれてきてもらい搾乳することもある。とはいえこれは特定の季節の出来事であり、頻繁におこることではない<sup>(24)</sup>。都市部に住む不在家畜所有者に至ってはそうした機会はほとんど持つことはなく、彼らのように牝馬の管理について

は牧夫や不在畜群管理者に任せっきりという傾向が見られるのである。

## 6.2. 新たなる不在畜群管理者の出現

不在家畜所有者は通常自らの馬を見る必要性は感じない——こうした態度は単に彼らの志向が仔馬肉の消費に向いているからだけでなく、馬群による周年放牧という群管理のあり方からくる必然性でもある。これまで個人を紹介してきたので、生産団体の例を見てみよう。

メギノ・カンガル郡に隣接するカンガル郡エクチョム村にすむ S. ナザーロフ氏（50代、仮名）の農民経営体の状況を紹介しよう。彼らの農民経営体はヤクーチアにおいて最も典型的なものの一つである。この団体の主生産物は牛飼育と野菜栽培である。それ以外に牝馬を3頭もっているが、それらは村の旧ソフホーズ系生産団体に委託している。ナザーロフ氏は通常、放牧地にいる自分の牝馬には取り立てて注意をはらうことはない。その意味で不在家畜所有者として最も重要なのは、毎年秋に仔馬肉を受け取ることである。彼は、2000年の晩春に一頭の牝馬を屠ったという。というもこの牝馬が数年続けて出産しなかったからである。彼は、旧ソフホーズの不在畜群管理者に、委託管理及び種牡による種付け料として毎年現金を少々払っている<sup>(25)</sup>。

この事例は農民経営体という民間の生産団体であるわけだが、上記を見る限り、村や町に住む人間と自分の家畜に対する態度は変わらないことがわかる。ナザーロフ氏の農民経営体も含めて、委託された馬は、牧夫によってどのように扱われているのだろうか。メギノ・カンガル群のプィティジェフ村の旧ソフホーズ系生産団体に職業牧夫として働く P. ロマノフ氏（男性、1968年生、仮名）は自分に与えられた仕事を次のように説明している。

馬牧夫（tabunshik）の主要な仕事は、放牧地にいる国家の馬群の監視をすることであって、特に頼まれていない限り、私有の馬群や個人の馬には関係ない...それから私有の馬群であっても（すべての構成馬を）一人が所有していることは普通なくて、何人かでもっている。もし誰かが（私有として）種牡をもっていたら、そいつは（馬群の管理・経営上）重要な人間だ。なぜならその人は同時にたくさんの牝馬をもっているに違いないからね。[括弧は高倉挿入]

上記の「国家の馬群」とは、旧ソフホーズ系生産団体の所有するものである。法的に

はすでに国家所有ではないが、ソ連時代と同様に表現している。牧夫は特に個人的に委託されるか、不在畜群管理者から命令されない限り、個人の馬の管理は自分の仕事ではないと考えていることがわかるだろう。また後半からは、種牡の所有者が馬群に対して大きな影響力をもっていることがうかがえる。これは馬群の所有者の質つまり「国家所有」あるいは私的所有いずれの場合でも同様にいうことができる。そして実際、私が調査した範囲では、種牡の圧倒的多くは旧ソフホーズ系生産団体によって所有されていた。聞き取りに応じてくれた不在家畜所有者によると、かつては自らの限られた牝馬を国家所有の馬群に混ぜてもらうしかなかったという<sup>(26)</sup>。私有の馬群という存在は近年の現象なのである。そこにはソ連崩壊後の家畜の私的所有の制限撤廃や、ソフホーズに代わるさまざまなタイプの生産団体が出現したという背景がよこたわっている。そうしたなかで人によっては多くの牝馬に加えて、種牡をも私的に所有するようになり、馬群の構成について自ら責任を負うような人間も現れている<sup>(27)</sup>。

そうした事例を紹介しよう。S. ボリソフ氏（1959年生、男性、仮称）は、メギノ・カンガル郡パブロフスク村の農民経営体を弟とともに経営している。ここでは馬及び牛飼育に加えて、養鶏・養豚、野菜栽培がおこなわれている。彼の農民経営体の馬飼育では数頭の騎乗馬に加えて、2頭の種牡と12頭の牝馬がおり、私的な馬群を作り放牧している。馬群の所有構成は、彼らの馬だけではなく村に住む友人の馬も含まれている。馬群が放牧されている放牧地は、彼らが旧ソフホーズからリースしたものだ。この農民経営体には専属の職業牧夫が雇用されているわけではない。ボリソフ氏は、彼の村の旧ソフホーズ系生産団体で働く職業牧夫に助けてもらうか或いは彼とその兄弟で馬群を見回る仕事をしている。

ボリソフ氏の資料は、農民経営体が自ら馬群管理を行っている例である。いわば、前述の牧夫の言葉にあった「私有馬群」にあたる。そしてボリソフ氏が述べているように彼は種牡の所有者であり、2組の馬群を保有している。興味深いのは彼らの馬群管理の仕方である。第一に、同じ村の中の旧ソフホーズに勤める牧夫を臨時に雇うつまりアルバイト牧夫（part-time herder）の存在である。これはボリソフ氏らが不在畜群管理者であることを示している。第二に、農民経営体の経営者自らが牧夫として働いているという点である。そこには不在畜群管理者と牧夫の違いは存在していない。社会主義時代に確立されたこの二つの役割分担が融合していると読みとることが可能なのである。かつて、職業牧夫として働いた者のなかには、年齢を重ねソフホーズの幹部つまり不在畜群管理者としてその後の人生を生きた者もいる。しかしながら社会主義体制下においては、牧夫としての技能をもつ不在畜群管理者が独自の生産団体を

形成するという事はなかった。その意味で、ポリソフ氏らの取り組みはポスト社会主義下で現れた新しいタイプの馬群管理である。この側面をみることで、いわば産業化された先住民社会にあって家畜の所有と管理が分離されない伝統的な牧畜民像が垣間見えるともいえなくはない。とはいえ、それは過度な解釈であろう。なぜなら彼らはあくまで定住生活を基盤とし、馬飼育以外の生産部門にも携わる経営者だからだ。さらに注意したいのは、彼らの私有馬群の構成がこの農民経営体のみの家畜によって構成されているわけではないことである。友人・知人の牝馬が混じっていることは、そこに何らかの委託関係が存在していることを示唆している。

ポリソフ氏のような馬群管理を自ら行う農民経営体がどのくらい普及しているのか現在の時点では十分調査できていない。とはいえ、こうした存在はかつて村落に一つしかなかったソフホーズを中心とする不在畜群管理者・牧夫・不在家畜所有者の三者間の関係に大きな影響を与えていることはいままでもない。同じ村のなかに不在畜群管理を担う人間が生産単位を超えて複数化したことは、牧夫に対する雇用や委託関係という意味において、人々に様々な選択肢を生み出したからだ。そうした当然の結果が、委託関係の複雑化であり、これに対応するように三者の間にかつて見られたような上下関係が緩和・崩壊したのである。ポリソフ自身が示しているように不在畜群管理者と牧夫の間の役割の差異が消滅しかかっている場合すらある。前節で述べたように、不在家畜所有者は、村内部にとどまることなく、村外や都市部からも出現していることを勘案すれば、その傾向は一層強まっていると述べる事が可能だろう。さらにこのことは、馬群が放たれる放牧地の問題にも及んでいる。ポリソフ氏による放牧地の賃貸だけではない。メギノ・カンガル郡タバガ村の旧ソフホーズは、隣接する別の郡に位置する旧ソフホーズが管轄下におく放牧地を近年賃貸するようになった。より具体的にいえば、彼らは馬群そのものではなく馬群に編成される以前の仔馬群や若馬群のためにより良い放牧地を探し出し、夏の間、放牧しているのである。かつてソフホーズを中心とし行政村落内部ですべて完結していた牧夫雇用・家畜の委託・畜群管理がかみ合った生産諸関係——そこに見られた社会経済的序列が崩壊し、その組み合わせは大幅に複雑化している——それが現在の状況なのだ。

## 7. 結論と展望

本稿はシベリア先住民のサハ社会を対象とし、委託関係つまり家畜の保有と管理が

別であることを鍵概念として、産業化された先住民社会のあり方と彼らの牧畜の今日に至る変容を論じてきた。伝統的に半遊動的だった牧畜民サハの生活様式は、少なくとも19世紀において定住化の様相を帯びていくことになるが、その傾向は社会主義体制の中で不可逆的な点まで到達し、現在に至っている。その時代的標識の一つとして提示できるのが、1960年代のホルホーズの拡大化＝ソフホーズ化であり、行政村落の統廃合である。その結果、農村で暮らす人間であっても職業選択の幅が増え、近代化された牧畜＝畜産に従事せずとも暮らしていける状況を作りだした。こうしたなかにあつて本稿が焦点をあてた馬飼育は、社会主義体制以前も含めて今日に至るまで、何らかの形で委託関係を介在させ営まれてきた。これは彼らの伝統的馬飼育の方法——馬群による周年放牧——に由来するが、その基本的仕組みは社会主義体制にあつても踏襲され、肉生産を主とする畜産と化した形で継続されてきた。これを支えたのは、生産されてきた馬肉特に仔馬肉の消費とそのあり方に対するサハ社会の食文化だった。ポスト社会主義下においては、この彼らの文化的指向性に一層の拍車がかかっている。家畜をはじめとする生産手段の私有化の浸透と民間生産団体の育成促進が国家によって進められ、これに重なるように1980年代後半以降旧ソ連各地で顕在化した民族・文化復興の気運がサハ社会でも台頭したからである。そうしたなか仔馬肉を得るための不在家畜所有者は、そのなり手となりうる資格の枠組み自体が拡大し、同時に自らの家畜を委託する（個人・団体含めての）対象者の幅が広がった。

そうした過程と、その過程の担い手達の関係をより明確にした形で論じるために、私は現代牧畜研究で論じられている不在畜群所有の概念を応用した。不在畜群管理者と不在家畜所有者という新たな概念を提示し、これに牧夫を加えた三つの行動主体を分析の対象としたのである。これによって従来のシベリア民族誌で用いられてきた「牧夫（及びその家族）とホルホーズ・ソフホーズ」といった二者関係に注目した民族誌に代わって、社会主義体制下で確立された経済制度が生み出した「その他多くの非畜産業従事者」を射程にいられた研究が可能となった。不在家畜所有者による委託関係への着眼とは、産業化された先住民社会それ自体を対象として、その社会経済的動態に接近することだったのである。農業関係統計資料と民族誌資料を組み合わせた考察から導き出させたのは、社会主義体制下で確立された行政村落・ソフホーズを中心とする生産諸関係——牧夫雇用・家畜の委託・畜群管理——における権威・序列の緩和・崩壊と、その生産諸関係自体の拡大・複雑化が現在進行しているという結論である。

最後に、本論が定位した方法論的枠組みを確認することで若干の展望を述べておきたい。第一に、シベリア先住民の民族誌研究にあつて、社会主義体制のなかで産業化

された先住民社会と伝統的生業（牧畜）の変容を分析する際に必要な分析対象を三つの主体——不在畜群管理者・牧夫・不在家畜所有者——として明示したことだ。こうした分析主体の設定は、伝統的な遊動牧畜・牧畜からソビエト社会主義下で近代化した社会つまり定住化と集団化を経験した先住民に対して、ある程度共通して適応可能である。第二に、そうした三者への着眼によって始めて、農業政策・統計資料等のマクロな資料とミクロな民族誌的資料をより効果的に組み合わせた分析が可能となるということである。もちろん私の分析手法は一つの方法でしかないし、また統計資料の信憑性に対する批判的検討が必要であることはいうまでもないだろう。とはいえ、社会主義体制以降、膨大に蓄積されてきたマクロな統計資料が示す状況と微視的な民族誌的観察をどのように接合せうるかについて一定の方法論的見通しは提示したといえよう<sup>(28)</sup>。

筆者の見通しでは、上記二つの方法論的定位は単にシベリア先住民だけでなく、旧ソ連やモンゴル・東欧といったソビエト型社会主義的近代化を経験した旧伝統的牧畜社会全般に対して（理論上は）応用可能である。もちろん民族誌的研究の目標は、あくまで個別特定社会で生起する文脈の歴史的・文化的・社会学的な解明であることはいうまでもない。とはいえそれらの文脈の解明が単に地域・民族といった枠組みに対してのみ還元されるだけでは不十分である。コルホーズ・ソフホーズ、ブリガーダといった旧ソ連型社会主義圏に偏在する諸社会制度を現地の文脈に沿って明らかにすることは、比較の視座とそれにともなう方法論の確立なしには十分な分析ができないからだ。さらにいえば、この問題の解明に必要な視座は、牧畜社会の近代化というより広範囲な研究枠組みとの緊張感にみちた接合を行うことによってしかなしえない——と私は考えている。シベリア民族誌研究における比較の視座の確立をふまえた研究の実践を今後の課題とすることで本稿を終えよう。

付記：本論文は、佐々木史郎編2003『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究』国立民族学博物館（科研費成果報告書）に所収された論文の再録である。

## 注

(1) 例えばツングース系のエヴェン（あるいはエヴェンキ）がトナカイ飼育、サハは牛馬飼育

- というのは伝統生業と民族アイデンティティの関係において主張される。ここでは、特定の民族と結びついた伝統的生業という分析枠組みを取り立てて強調せず、むしろサハ語を母語・日常語とする人々による生業実践という分析枠組みをもちいる。その意味で本稿におけるサハ社会とは、民族としてのサハだけを念頭においたものではなく、サハ語を中心とする言語コミュニティというより広い意味である。なお、こうした立場は近年ロシアにおいて生態人類学的研究を進めるコズロフのいう「住民 (naselenie)」の概念に近い [Kozlov 1999]。
- (2) 例えば『Polar Research』19-1号 (2000年) においては「トナカイ／カリブーシステムにおける人間の役割についてのワークショップ」のプロシーディングが特集として組まれている。
  - (3) ソ連においては年金制度や国内移動の自由の問題とも絡めて、個人が保有・携帯すべき「労働手帳 (trudovoi knizhka)」があったが、トナカイ牧夫職もまたこの手帳に記載される職業である。なお、この労働手帳の制度は現ロシアでも継続している。
  - (4) 群行動管理と生殖管理の概念については谷 [1987] 及び Paine [1964] を参考。
  - (5) ロシアにおける私的所有の法制度の展開については森下 [1997] を参照。
  - (6) 日本語では通常、「農民経営」と訳されている [例えば山村1997]。本稿では法的な意味での法人という性質を強調するため「農民経営体」とする。
  - (7) こうした視点から、ソ連崩壊後出現した氏族共同体——先住民の伝統的生業と関わる第一次産業の生産団体——に対する具体的な分析については今後の課題である。
  - (8) ちなみにトナカイ飼育においては家畜自身の行動要因によって形成されメンバーシップが確定した「群」は存在しない。ブリガードが管理の対象とする「群」は人の社会経済的動機から構成され、家畜自身がその範囲を自らメンバーとして認識することはない [高倉2000a:159-162]。
  - (9) トナカイ飼育の場合は遊動生活の際に天幕住居が用いられるのが基本である。とはいえ、トナカイ牧夫も場合によっては丸木小屋を使うことがある [高倉1997]。
  - (10) すでに述べたように北部ヤクーチアにあつては、周辺の民族から影響を受けて取り入れたトナカイ飼育も行われていた [Jochelson 1975(1926):363-367; Gurvich 1977]。
  - (11) この遊動のパターンを「移牧 (transhumance)」と呼んでいる研究者もいる [Jordan and Jordan-Bychkov 2001:48]。
  - (12) この三番目の型は、利用期間が秋の一ヶ月未満で、19世紀初頭にはすでにあまり見られなくなっていたと言われる。
  - (13) アラースの面積は小さいもので0.5ヘクタール、大きいものだと2000ヘクタールに達する [斉藤1995:139]。
  - (14) ヤクーツクの年平均気温は零下15.2度。1月の年平均気温は零下41.2度、7月の年平均気温は18.7度である。なお平年を算出する上での統計期間は1961～1990年である [国立天文台(編)『理科年表2001年度』312-313頁, 丸善, 2000年]。
  - (15) 1963年前後はコルホーズの拡大化、さらにそれらを統合したソフホーズ化の時期と一致しており、農業生産拡大の傾向の中で馬群による周年放牧様式を継続していくことを確認した決議だと思われる。
  - (16) 法的にいえば、個人所有 (lichnaia sobstvennost' = individual ownership) であつて、ソ連崩壊後の私的所有 (chastnaia sobstvennost' = private ownership) とは異なっている。とはいえ本稿の文脈ではこの二つの違いをふまえる必要はなく、両者を一括して私有・私的所有と表記する。
  - (17) ちなみにこのバタガイアリタでの主要産業はトナカイ飼育だが、トナカイの所有制限は、フルシチョフとゴルバチョフ時代に40頭とあつただけでそれ以外はなかったという [高倉2000a:104]。
  - (18) ポスト社会主義下におけるサハの個人副業経営の状況については拙稿参照 [高倉2000b]。
  - (19) 農牧用地の私有については、原則として団体・法人は可能であるが、個人は現在でも不可能である。それゆえ個人に対しては「相続可能な終身占有権」が認められている。これについては山村 [1997:12-13] 及び拙稿 [高倉2000b] を参照。
  - (20) サハ共和国において氏族共同体の担い手の中心は、サハ以外のシベリア先住民である。ここではトナカイ飼育を始め狩猟漁労が主な生産部門である。サハ人の多くは、氏族共同体ではなく、「農民経営体」を選択する場合がほとんどである。というのもサハ共和国の「氏族共同体に関する法律」においては、その対象がサハ以外のシベリア先住民及び彼らの伝統的

生業に従事する者と規定されているからである [吉田1996:247]。共和国の文脈では、民族共同体はサハ人以外のシベリア先住民、農民経営体はサハ人及びロシア人というような棲み分けが実質上できあがっている。これはそもそもソ連時代にサハが自治共和国を形成したことで、北方少数民族の範疇から分離され、そのことがサハが北方少数民族とは別の範疇として自らを自己認識するようになっていくことが背景にある。実際、サハ人のなかには自らは [北方少数民族] といった [先住民 *korennye*] ではなく、ロシア人より先に移動してきた民族であるという意識を持っているものもある。この問題は、サハ内部のエスニシティ、民族間関係に関わるものだが、ここではその複雑さを指摘するにとどめる。なお佐々木の北部ヤクーチアのエスニシティをめぐる分析はこの点で参考になる [Sasaki 1998]。

- (21) 出典:ロシア連邦サハ共和国農業省家畜飼養部, 馬飼育課での保管文書「Doc/ Zadanie ozhidaemoe pogolov'e loshchadei na 2000g. (15/02/2000), in the File/ Postonovlenie # 559」。
- (22) 出典:ロシア連邦サハ共和国農業省家畜飼養部, 馬飼育課での保管文書「Doc/ otchet formy #24 za 1 Feb. 1999 - 1 Jan. 2000, p/k Erel in Tachinskii ulus, and Doc/ Oborot loshadei GUP Algsy za 1999god- Abyjsckii Ulus, in the File/ Postonovlenie # 559」。
- (23) 草刈りについては拙稿参照 [高倉2000b]。
- (24) ちなみに通常村人は牛を飼っており、牛乳が日常的に利用 (飲用・加工) されている。
- (25) 同じことは牛の場合にいえる。この村には獣医詰所があり、そこで牝牛の種付けを受けることができる (有料)。しかしナザーロフ氏によると牝牛は通常 (冬期シーズン以外の) 日中放牧している間に自由に交尾する場合の方が多という。もちろんこのときには特に種付け料を払うことはない。
- (26) 人々の中には去勢した乗用の馬をもっている者もいるが、数の上では多くはない。なお乗用馬の場合、馬群の管理法とは異なっている。この点については拙稿参照 [Takakura 2002]。
- (27) 私有の種牡を中心とする私有馬群内の所有関係はかなり複雑である。その理由は馬群の編成の仕方由来するが、これについて別稿で論じることにした。
- (28) 南シベリアの牛馬飼育民ブリヤート人を扱った渡邊 [2000] は、社会主義体制下で構築された「集団農場」を伝統的社会組織に代わる新たな「社会組織」として位置づけ、ポスト社会主義下における民営化過程と所有構造の関係の変容を扱った。彼の研究の焦点はとりわけ土地保有の実践と集団農場の記憶の重なりあいにおかれ、本稿の焦点とは異なっている。とはいえコルホーズを社会組織として扱う視角及びマクロな政治経済学的資料とミクロな民族誌的観察を組み合わせる議論の提示は本稿の枠組みを考える上で参考になった。

## 参考文献

- 池谷和信  
1999 「シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8:1-30。
- 小長谷有紀  
2001 「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の牧畜経営の多様化——牧地配分後の経営戦略」横山廣子編『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告20号), 15-43頁。
- 斉藤農二  
1995 「サハ (ヤクーチア) の草原と牛馬飼育」『スラブ研究』42:135-147。
- 佐藤 俊  
1995 「畜友——ラクダがつなく人間関係」大塚柳太郎 (編)『講座地球に生きる (3) 資源への文化適応』95-120頁, 東京: 雄山閣。
- 曾我 亨  
1998 「ラクダの信託が生む絆——北ケニアの牧畜民ガブラにおけるラクダの信託制度」『アフリカ研究』52:29-49。



- 高倉浩樹  
 2000a 『社会主義の民族誌——シベリア・トナカイ飼育の風景』東京：東京都立大学出版会。  
 2000b 「中央ヤクーツ農村部における土地私有制度と副次的生業に関する覚書」齊藤晨二編『シベリアへのまなざしⅡ：シベリア牧畜・狩猟民の生き残り戦略研究』45-58頁，名古屋：名古屋市立大学。  
 2003 「公共の記憶と民族文化の布置——サハにおける馬乳酒祭と駒繫ぎ」瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館，観光，そして民族文化の再編』69-118頁，東京：風響社。
- 利光（=小長谷）有紀  
 1986 「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』69-5:141-164。
- 松園万亀雄  
 1967 「ヤクート族のクミス酒」『民族学研究』31-4:313-316。
- メドヴェージェフ，Z.A.  
 1995 (1987)『ソヴェト農業 1917-1991——集団化と農工複合の帰結』札幌：北海道大学図書刊行会。
- 森下敏男  
 1997 『ポスト社会主義社会における私的所有の復活』東京：多賀出版。
- 山村理人  
 1997 『ロシアの土地改革：1989～1996年』東京：多賀出版。
- 吉田 睦  
 1996 翻訳「北方少数民族遊牧民族共同体に関する法律」齊藤晨二編『シベリアへのまなざし——シベリア牧畜民の民族学的研究』247-251頁，名古屋：名古屋市立大学。  
 1998 「西シベリア・ギダン・ネネツの食文化——現代極北トナカイ飼養民の食の文化的・社会的解釈」『民族学研究』63-1:44-66。
- 渡邊日日  
 2000 「所有構造の変容と集団主義の軌跡——民営化過程におけるロシア連邦ブリヤート共和国のホルホーズについて」『アジア経済』XLI-8:20-56。  
 2002 「移行期社会の解釈から諸概念の再構成へ——ユーラシア社会人類学研究の観察」『ロシア史研究』70:41-61。
- Anderson, D.G.  
 2000 *Identity and Ecology in Arctic Siberia: The Number One Reindeer Brigade*. Cambridge University Press.
- Alekseev, A.  
 1997 Yakuty: Traditsionnaia kul'tura i sovremennost'. In *Narody Sibiri: Prava i vozmozhnosti*. Pp. 72-79. Novosibirsk.
- Atlasov, S.V.  
 1992 *Istoriia razvitiia skotvodstva i konevodstva v Yakutii (1917-1928 gg.)*. Yakutsk.
- Beck, L.  
 1980 Herd owners and hired shepherds. *Ethnology* 19-3: 327-351.
- Fedorov, E.G.  
 1997 Natsional'naiia kul'tura segodnia: problemy i perspektivy. In *Kul'tura narody Sibiri*. Pp. 238-243. Stb: MAE RAN.
- Fedorova, E.N.  
 1998 *Naselenie Yakutii: Proshloe i nastoiashchee*. Novosibirsk: Nauka.
- Fernandez-Gimenez, M.  
 1999 Role of absentee herd owners. *Human Ecology* 27-1:1-27.
- Fondahl, G.  
 1998 *Gaining Ground?: Evenkis, Lands and Reform in Southeastern Siberia*. Boston: Allyn and Bacon.
- Gilles, J.L. & Gefu, J.  
 1990 Nomads, ranchers, and the state: The socio-cultural aspects of pastoralism. In J.G. Galaty & D.L. Johnson eds. *The World of Pastoralism: Herding Systems in Comparative Perspectives*.

- Pp.99-118. New York: Guilford Press.
- Golovnev, A.G. and G. Oshrenko.  
1999 *Siberian Survival: The Nenets and Their Story*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Gotovtsev, B.V.  
1995 *Konevodstvo Respublika Sakha: Uchebniki i uchebnye posobiia dlia sel'skokhoziaistvennykh zavedenii*. Yakutsk: INPK <Sakhapoligrafizdat>.
- Gray, P.A.  
2000 Chukotkan reindeer husbandry in the post-socialist transition. *Polar Research* 19-1: 31-38.
- Gurvich, I.S.  
1977 *Kul'tura severnykh yakutov-olenevodov*. Moskva: Nauka.
- Hjort, A.  
1982 A critique of <ecological> models of pastoral land use. *Nomadic Peoples* 10: 11-25.
- Humphrey, C. & D. Sneath  
1995 *The End of Nomadism?* Durham: Duke University Press.
- Ikeya, K.  
2001 Chukchi reindeer grazing and changes to grazing territory in Northeastern Siberia. *Senri Ethnological Studies* No.59: 81-100.
- Ingold, T.  
1980 *Hunters, Pastoralists and Ranchers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ivanov, V.F.  
1992 *Sotsial'no-ekonomicheskie otnosheniia v Yakutii: Konets 17 - nachalo 19v.* Novosibirsk: Nauka.
- Ivanov, V. N.  
1966 *Sotsial'no-ekonomicheskie otnosheniia u yakutov*. Yakutsk.  
2000 (ed.) *Pervye shagi fermerstva v Respublika Sakha (Yakutii)*. Yakutsk: IGI ANRS.
- Ignat'eva, V.  
1994 *Natsional'nyi sostav naseleniia Yakutii*. Yakutsk.
- IYaA  
1957 *Istoriia Yakutskoi ASSR, tom 2*. Moskva: Izd-vo Akademii Nauk SSSR.
- Jochelson, W.  
1975 [1926] *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*. New York: AMS Press.  
1933. *The Yakut*. New York: The American Museum of Natural History.
- Jordan, B.B. & T.G. Jordan-Bychkov.  
2001 *Siberian Village: Land and Life in the Sakha Republic*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Khazanov, A.M.  
1990 Pastoral nomads in the past, present, and future: A comparative view. In P.A. Olson ed. *The Struggle for Land: Indigenous Insight and Industrial Empire in the Semiarid World*. Pp.81-99. Lincoln: University of Nebraska Press.  
1998 Pastoralists in the contemporary world. In J. Ginat and A. Khazanov eds. *Changing Nomads in a Changing World*. Pp. 7-23. Brighton: Sussex academic press.
- Klovov, K.B.  
2000 Nenets reindeer herders on the lower Yenisei River: Traditional economy under current conditions and responses to economic change. *Polar Research* 19-1: 39-48.
- Konstantinov, Y.  
1997 Memory of Lenin Ltd.: Reindeer-herding brigades on the Kola Peninsula. *Anthropology Today* 13-3: 14-19.
- Kozlov, V. N.  
1999 Metodologicheskie osnovy etnicheskoi ekologii i voprosy ikh prakticheskogo primeneniia. In Stepanov, V.V.(ed.) *Metody etnoekologicheskoi ekspertizy*. Pp.14-29. Moskva: IEA RAN.
- Korotov, G.P.  
1989 Zhivotnovodstvo. In *Atlas sel'skogo khoziaistva Yakutskii ASSR*. Yakutsk.

- Krupnik, I.  
 1998 Understanding reindeer pastoralism in a modern Siberia. In J. Ginat and A. Khazanov eds. *Changing Nomads in a Changing World*. Pp.223-242. Brighton: Sussex academic press.  
 2000 Reindeer pastoralism in modern Siberia: research and survival in the time of crash. *Polar Research* 19-1:49-56.
- Little, P.  
 1985 Absentee herd owners and part-time pastoralists. *Human Ecology* 13-2: 131-151.
- Matveev, I.A. (ed.)  
 1999 *Sistema vedeniia agropromyshlennogo proizvodstva Respublika Sakha (Yakutiia) do 2005 g.* Novosibirsk.
- Mearns, R.  
 1996 Community, collective action and common grazing: the case of post-socialist Mongolia. *The Journal of Development Studies* 32-3:297-339.
- Nefedova, T.  
 2002 Tri uklada sovremennogo sel'skogo khoziaistva Rossii: Spetsifika i vzaimodeistvie. *Vestnik Evrazii* 16: 7-27.
- NPOYa.  
 1993 *Polovozrastnaia struktura tabuna loshadei yakutskoi porody pri dorashchivanii i realizatsii molodniaka v vozraste 1,5 goda.* Yakutsk: NPOla i IaNIISKh.
- RSTs.  
 1999 *Respublika Sakha (Yakutiia) v tsifrakh: Statisticheskii sbornik.* Yakutsk: Gosdarstvennyi komitet PF po statistike i GK RS(Ya) po statistike.
- Sasaki, S.  
 1998 Segmentary hierarchy of identity: The case of Yakuts and Evens in Northern Yakutia. In K. Inoue (ed.) *Quest for Models of Coexistence: National and Ethnic Dimensions of Changes in the Slavic Eurasian World*. Pp.317-338. Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University.
- Takakura, H.  
 2002 An institutionalized human-animal relationship and the aftermath: The reproductive process of horse-bands and husbandry in Northern Yakutia, Siberia. *Human Ecology* 30-1:1-19.
- Tokarev, S.A.  
 1945 *Obshchestvennyi stroi yakutov XVII-XVIIIvv.* Yakutsk.
- Tokarev, S.A. & Gurvich.  
 1964 The Yakut. In M.G. Levin & L.P. Potapov eds. *Peoples of Siberia*. Pp.243-304. Chicago: The University of Chicago Press.
- White, C.  
 1990 Changing animal ownership and access to land among the Wodaabe (Fulani) of Central Nigeria. In P. Baxter & R. Hogg (eds.) *Property, Poverty and People: Changing Rights in Property and Problems of Pastoral Development*. Pp. 240-255. Manchester: Dept. of Social Anthropology and International Development Center, University of Manchester.
- Vakhtin, N.  
 1994 Native peoples of the Russian Far North. In Minority Rights Group ed. *Polar Peoples: Self-Determination and Development*. Pp.29-80. London: Minority Rights Publications.
- Yoshida, A.  
 2001 Some characteristics of the tundra Nenets reindeer herders of western Siberia and their social adaptation. *Semri Ethnological Studies* No.59: 67-80.
- Zykov, F.M.  
 1986 *Poseleniia zhilishcha i khoziaistvennye postroiiki yakutov XIX - nachalo XXv.* Nobosibirsk: Nayka.